

## ゆるやかな共有

— 石垣島川平の来訪神儀礼における「神口」 —

澤井 真代

はじめに

琉球諸島において、儀礼の場や日常の農作業などの仕事の場、またあそびの場など、生活の様々な場面で発せられる歌や唱え言については、特に文学研究の分野に多くの先行研究がある。ここでは琉球全域の、テキストやジャンルにおいて多様な歌や唱え言が体系的に整理され、それらの文学史的展開が考察された<sup>①</sup>。ただ、歌や唱え言についての俯瞰的な捉え方から成果が出された一方で、これらの「ことば」<sup>②</sup>が各地域の人々にとって実際にどのようなものであるかを探る立場からの個別具体的問題への取り組みは、まだあまり多くない。これをふまえ本稿では、特に儀礼におけることばについて、事例に即し考察する。

各地域の人々の生活を見つめ、ある事柄が当該社会における人々にどのように行なわれ、どのように観念されているのかを考察する分野として、民俗学、(文化／社会)人類学が挙げられるだろう。琉球諸島は民俗学と人類学が交差する場として、そ

の文化がこれまでに数多くの民俗／族誌に記述され、社会や文化における多様な問題が論じられてきた。しかしここでは、儀礼が重要なテーマとして様々な形で扱われてきたにも関わらず、琉球諸島の儀礼に不可欠な要素としての歌や唱え言が問題化されることは極めて少なかった。その理由の一つに、方言話者にとつてさえも難解な、儀礼における歌や唱え言の意味内容が、他地域から来た研究者にはさらに理解し難いことが挙げられている(渡邊二〇〇四・一七二)<sup>③</sup>。

この理由の背景には、歌や唱え言についての考察の大部分がその意味内容の把握にあるという考え方が伺われる。しかし、人々によつて実際に発せられることばをめぐっては、まして日常とは異なる特有のコミュニケーションがとられる儀礼の場のことばにおいては、その意味内容を捉えるのみでは考察しきれないことは、すでに明らかにされつつある<sup>④</sup>。ことばがどのように発せられ、聞かれ、身につけられ、受けとめられるのか、ことばについて考察するうえで、担い手のことばをめぐる行為

と思考を注意深く探る必要があるだろう。

こうした視点から琉球諸島の儀礼で行なわれる歌や唱え言をあらためて見ると、もう一つの多様性―発し方、聞き方、習得方法など、人とことばの関わり方における多様性に気付かされる。今後こうした観点からの歌や唱え言の比較により、琉球諸島の文化研究に新たな示唆をもたらすことができると考ええる。

筆者は地域間の比較をいずれ行なうことを視野に入れつつ、目下石垣島川平集落<sup>（かひら）</sup>一地域の儀礼におけることばの諸相を考察している。本稿ではこのうち、一年に一度行なわれる来訪神「マユンガナシ」の儀礼における唱え言「カンフツ（神口）」に着目する。マユンガナシのカンフツは従来、秘儀的なことばと見なされてきたが、ここでは調査<sup>（5）</sup>に基づき、カンフツが川平の人々にゆるやかに共有されていることを提示したい。

## 一・川平の年中儀礼と二つの神口

川平は、八重山諸島の行政・交通上の中心地となっている石垣島の南部地域から、北西に約一八キロ、乗り合いバスで約四十分の地点にある。二〇〇六年十二月現在で三六九世帯七四一人が住み、農業（サトウキビ、米、パッションフルーツ、肉用牛など）、観光業、食品加工業、黒真珠養殖が営まれている。川平には集落単位の儀礼が年間に二六回あり、それらは農作物の生育過程に沿って作物のつづがない生育や豊作を祈願する儀礼―麦・粟や米の播種儀礼、作付けにあたっての儀礼、作物

の茎や葉の順調な生育を祈願する儀礼、風害や虫害の除去祈願儀礼、豊かな実りの祈願、麦や豆の初上げ及び稲の初穂取りの儀礼、収穫感謝祭―と、住民の健康祈願儀礼から成る。

儀礼は旧暦で行なわれるが、儀礼の内容から見た年のかわりめは旧暦の一月一日ではなく、播種儀礼に先立って毎年旧暦九（十月頃の戌戌の日から五日間にわたり行なわれる「節祭」）にある。この節祭初日の夜に、蓑笠を身に付けて来訪神「マユンガナシ（真世加那志）<sup>（6）</sup>」に成り代わった男性達が家々を訪問し、人々に向かって「カンフツ」を唱える。マユンガナシのカンフツでは、来る年にもたらされるべき幸せの数々―農作物の順調な生育と豊作、人々や牛馬の健康など―が唱え上げられる。各家では饗応の膳を用意し、マユンガナシをもてなす。

川平では、同じくカンフツと呼ばれる唱え言がもう一つある。それは、女性神役「ツカサ（司）」が年間の儀礼を通して、個々の儀礼目的に沿った祈願内容を神に伝える唱え言である。ツカサは集落の四箇所の拝所「オン（御嶽）」に一人ずつ就き、オンに属す神役の中で祈願の役割を最も重く担うが、その役割の中心に、神に向けてカンフツを唱えることが位置づけられる。

すなわち、作物の播種、生育途中、収穫、豊作感謝の各過程に沿って、年間を通して人としてのツカサから神に祈願のカンフツが唱えられる一方で、一年の節目の儀礼においては神としてのマユンガナシから人に向かって、年間を通して起こるべき幸せがカンフツによって唱え上げられるのである。これら二つ

のカンフツの詳細な比較は次の機会に行ない、本稿ではマユンガナシのカンフツについて検討していく。

## 二・過去の枠組みによる、現在への祈願

八重山の他地域と比べると川平の年中儀礼の数は多く、方法も古式が守られていると言われ、川平は信仰の篤い集落として知られる。しかし他地域と同様に川平の儀礼も、近代における社会や生活の変化と共にある。たとえば、儀礼で豊作を祈願する作物は、現在の川平で作られている作物と異なる。祈願対象の中心である米の種類も異なり、儀礼の暦には現在の川平で作られる二期米ではなく、明治のはじめ頃まで八重山一円で作られていた在来米の生育暦が反映されているため、儀礼の暦と現在の人々が行なう米作の過程は多少異なる。しかし、こうした差異はとりたてて問題にされず、人々はあくまで現在の川平について祈願を行なっている。過去の生活に沿った儀礼の枠組みに概ね沿いながら、むしろ「昔の通り」に儀礼を行なうことが重視されながら、現在の川平集落における作物の豊作や住民の健康について、多くの時間と労力と資力をもって祈願が行なわれているのである。

同様のことは、マユンガナシのカンフツの内容にも言える。

カンフツの冒頭では、「神の国から幸せをもたらしてきた」とマユンガナシ自身の来歴が述べられ、続いて川平の人々が耕していた土地の名が一つ一つ挙げられ、それぞれに「幸せをふり

まいてきた」と言われる。ここで挙げられる土地の名は川平内の地名にとどまらず、石垣島北部の平久保から、川平の西部の崎枝集落に至る広範囲に及ぶ。それは第二次世界大戦後すぐの頃まで川平の人々が、船に乗って集落外にも耕作に出かけていたこと（川平村の歴史編纂委員会編一九七六・二一五～一六）による。

次に、麦、粟、稲、黍、小豆、甘蔗のそれぞれの作物について、整地、播種、作付け、除草、収穫の行程と、各段階で起こるべき望ましい結果が一つ一つ唱え上げられる。続いて家の人々の健康、子孫繁栄、家畜の繁昌、貢布の上出来がよまれる。貢布とは、一六三七年から一九〇三年まで、琉球王府により宮古と八重山に敷かれていた人頭税制度のもとで女性が織って上納することとされていた布のことである（川平村の歴史編纂委員会編一九七六・一五〇～一一）。

以上のようなカンフツに出てくる作物のほとんどは現在既に作られていない。また遠隔地への耕作や人頭税制度など、かつての川平の人々の生活に即した内容が主となっている。このような「過去の枠組みによって現在の人々の幸せを祈願する」あり方は、現在の川平に生活する人にとつてのカンフツの「覚えにくさ」につながっている。たとえば、かつて実際に集落外へ耕作に出かけていた人であれば、具体的な土地を思い浮かべながらカンフツに出てくる土地の名を覚えることができる。一方で、集落外での耕作を過去の話としてしか聞くことのできない

人は、土地の名のみを暗記しなければならぬ。しかしこうした困難が起こりながらも、マユンガナシのカンフツは現在まで、人々に幸せな新年をもたらすものとして行なわれてきている。

### 三・マユンガナシのカンフツ―共有されることば

#### (1) 個別の先行研究

マユンガナシのカンフツは従来、「神」による唱え言として、その秘儀性が強調されることが多かった。<sup>8)</sup> こうした研究傾向の背景には、折口信夫が川平を含む南島の来訪神儀礼にふれたことを一つのきっかけとして「国文学の発生」論や「まれびと」論を展開した経緯がある。折口は「国文学の発生」第一稿（第四稿（一九二四～九年）において、「他界（常世）」から、時節を定めて人の住む場所を訪れる神（「まれびと」）が唱える言葉（「呪言」「神語」）が、日本文学の初源の姿である」という論を展開した。この論に基づき、マユンガナシのカンフツは琉球諸島の文学において、「神による唱え言」始原的なことば」として位置づけられてきたのである。

このように、カンフツの「神のことば」としての性質が着目される一方で、カンフツの担い手である人々の実際は、あまり問題にされてこなかった。しかし、カンフツの「秘儀性」や「神のことば」としての性質についても、それらを前提とするのではなく、ことばをめぐる人々の行為や思考をふまえて検討する必要がある。ここでは、習得過程や聞き手の問題に着目しなが

ら、マユンガナシのカンフツという「神のことば」が川平の人々にどのように受けとめられているのかを考察する。

#### (2) マユンガナシのカンフツの秘儀性

川平は公民館や小・中学校は集落に一つであるが、「上の村」と「下の村」という区分があり、マユンガナシ儀礼は上・下の村で別々に行なわれる。マユンガナシ成員は二〇〇〇年以降、上の村と下の村のそれぞれに概ね八人ずつである。成員の組織はオンの神役組織とは別個で、上・下の村それぞれの成員の中に「フームトゥ（大元）」と呼ばれる長がいる。成員は戊年生まれ男性から選ぶべきとされるが、近年はなり手が少なく、戊年でない男性からも選出されるものの、フームトゥは必ず戊年とされる。マユンガナシ儀礼の開始と終了の手続きや、儀礼十日前から始まるカンフツの練習は、フームトゥの家で行なわれる。

カンフツ習得の過程について成員・元成員は次のように話す。

カンフツは口から口へ教えるのが基本だが、最近では覚えのわるい人は書く（一九三四年生の成員による談話。二〇〇六年十一月聴取）。

カンフツの台帳が存在するが、これは、書き写してはいけない。写し間違えてはいけないから。自分は先輩の上手から

習って、畑のあぜで一休みしているときや、魚釣りをしながら、始めから終わりまで唱えて練習した。分からないことがあると、何回も先輩に聞きにいった。こうして覚えていく頃は、各人のカンフツも確かだった（大正〇昭和初期が生年の元成員による談話。二〇〇六年七月聴取）。

カンフツの習得においては口から口への伝授が基本であり、筆記具の使用は書き写す際の間違いへの懸念から不確かな方法とされていたが、近年は筆記具を利用するの習得も行なわれつつあるという。ただ、現在でも筆記具の使用は限定的であり、儀礼の場では決してテキストを見てはならず、カンフツは必ず暗唱される。また、カンフツの節回しや独特な声の出し方、儀礼の場における神としての態度や作法といった、マユンガナシ成員として学ぶべきことは先輩から後輩へ対面で教えられる事柄が大部分である。

筆記具を使用するかどうかに関わらず、カンフツは練習するときも人前でみだりに口にしてはいけないとされ、これは先の元成員が畑のあぜや海上において練習していた頃と現在に変わらない。カンフツの練習は、儀礼の十日前からフームトゥウの家庭で行なわれる全成員での練習以外の個人的な練習も、基本的にユンガナシの人には聞かれないように行なわれる。このようにマユンガナシのカンフツは習得過程における練習の場や時に制限があり、成員がカンフツを習得する過程―習得の「舞台裏」―

が成員以外の人に見えないようにされていることにおいては秘儀的であると言えよう<sup>9)</sup>。

しかし、カンフツは成員の間でのみ用いられることばではない。習得過程が秘された、すなわち「人間らしさ」が隠されたマユンガナシのカンフツは、「神」のことばとして川平の人々に向かつて発せられる。では、それを人々はどのように聞いているのだろうか。

### (3) 訪れる側と迎える側

マユンガナシは「六尺棒」という背丈ほどの長さの杖を持ち、これを音を立てて突きながら歩くが、訪問するべき家の庭先に来ると六尺棒を両手で持って胸元に当て、棒の先を前の地面に差し出して体を支え、立ったままうつぶき加減で一時間近くかけてカンフツを唱える<sup>10)</sup>。カンフツの大部分か、あるいはすべてを年輩者の「ムトゥ（二元）」が唱え、その間若輩者の「トゥム（伴）」は脇で控えている。この二人一組が、あらかじめ決められた順序に従い三、四軒の家を訪問することになっている。手ぬぐいを頭から顎に巻きクバ笠を深く被ったマユンガナシの顔は家の人々にほとんど見えず、カンフツを唱える声色も日常的な声とは異なるため、迎える側がマユンガナシ成員を誰であるか特定できないこともある。

一方マユンガナシを迎える家では、掃除や饗応の膳の用意をはじめとして、いろいろな準備が必要である。カンフツを唱え

るマユンガナシが立つ庭と、カンフツを聞く家の人々が座る部屋との間の戸や窓はあらかじめ取り払われる。またカンフツを唱え終えたマユンガナシは家の中に迎え入れられてもてなされるが、蓑笠を身に着けた神が屋内で動きやすいように、引き戸などを取り去っておく。そのうえで、座布団や、マユンガナシが口をすすぐ水を用意する。

こうして整えられた「神を迎える場」の中に、マユンガナシが訪れる。神を迎える準備について見るだけでも、迎える側の人々による様々なはたらきが、この儀礼を構成する不可欠の要素であることが分かる。さらに迎える側の人々はカンフツの聞き手、受けとめ手としても、儀礼過程の進行にも関わる次のような役割を果たしている。

#### (4) カンフツの聞き手―当主

来訪するマユンガナシに直接応対するのは、各家の当主である。カンフツを聞く間の当主は、ただ聞いているのみではなく、内容の区切りごとに繰り返される定型句<sup>(1)</sup>の後で、正座のまま頭を下げて「ウー」と言う返事を入れながら聞く。これは、ありがたいことばに対する感謝を込めた返事であるという。また当主は、カンフツが唱えられる進み具合を聞き取って、この後のマユンガナシへの饗応の準備について、汁物を温めるように言うなど家族に指示を出す。

さらに当主は、マユンガナシを家へ上げてもてなす場面にお

いて、儀礼過程を進行させていかなければならない。マユンガナシはカンフツを唱える以外にはことばを話さず、もてなしに対して「ンフー」と鼻から息を出す音で答える以外には、黙っている。黙って座るのみのマユンガナシに対し当主は、お礼を言い、酒食をすすめ、次の家に送り出す過程を、主体的に進めなければならぬ。

この時、当主からマユンガナシへ話しかける時のことばは、敬語を多く含む川平方言である<sup>(2)</sup>。さらに、マユンガナシに話しかけることばの中には、カンフツの文言が部分的に取り込まれている。カンフツ中の表現を用いることが、神に敬意を表する方法となつているのである。

以上のように、唱えられるカンフツの中に定型句を聞き取って適切に返事を入れ、唱えられるカンフツの進行状況を把握し、マユンガナシに対しカンフツ中の表現を用いながら話しかけて儀礼の場を進めなければならない当主には、カンフツについての知識が相当程度必要である。当主には神を迎えるうえでの知識とそれを実践する力が必要とされ、その知識と実践の中核に、カンフツを運用する能力があると言える。

マユンガナシを迎える作法をよく知らない人が新しく当主になると、作法を知る人に頼んで事前に迎え方を習いに行ったり、当日横について指導してもらう<sup>(3)</sup>。しかし、マユンガナシを迎える作法が最も身につく方法とは、自らがマユンガナシになることである。川平ではしばしば、次のように言われる。「マユンガ

ナシに立つた人でないと、マウンガナシを迎えられない」。すなわち、この儀礼をつつがなく進めるうえで最もふさわしい当主とは、マウンガナシの元成員である。場合によっては現マウンガナシよりもカンフツや儀礼に詳しい当主<sup>15</sup>元成員が、マウンガナシを迎え、カンフツを聞いているのである。

このように、カンフツを唱える経験を共有する現成員と当主（元成員）の間で、カンフツについての知識を駆使したやりとりがなされているのだが、訪れた先の家族皆に向けて唱えられるものであるカンフツはさらに、当主以外の人々にも様々な形で聞かれ、受けとめられている。

#### (5) 当主以外の聞き手、受けとめ手

儀礼当日の夜、マウンガナシが訪れてきた家の人々は、庭に面した部屋<sup>16</sup>に集まる。当主はマウンガナシの正面の位置に正座し、その他の家族は当主の後や横に座る。当主の妻は、饗応の準備のために台所に立つことも多い。

カンフツが唱えられる間はその声のみが響き渡っているというわけではない。家族同士で交わされる儀礼の段取りについての会話や、台所で膳を準備する音が聞かれる。一方でカンフツは、人々に向けて唱えられるものではなく、一言一句を人に分かりやすく伝えようとするものではなく、神としての低い声で唱えられる<sup>17</sup>。したがって、カンフツの声と他の音が重なるカンフツが部分的に聞こえにくくなる場合もある。こうした状況の

中で、カンフツは家の人々に聞かれている。

調査中、マウンガナシが訪れてくると怖がって泣いてしまう小さい子どもをしばしば見かけた。しかし、小学生以上の子どもは、カンフツを熱心に聞いていることが多く、時には当主のすぐ横に座らされている<sup>18</sup>。かつてそうした子どもの一人であった女性は、カンフツについて次のように語る。

小さい頃、マウンガナシのカンフツが珍しく、面白く思えて、マウンガナシが家に来ると父の傍でじつと聞いていて、カンフツを覚えてしまった。一年にいつぺんのことだけど、子どもはもの覚えが良いし（大正〳昭和初期が生年の女性による談話。二〇〇一年十二月、二〇〇七年七月聴取）。

この女性は現に、カンフツを部分的に節をつけて唱えることができる。

ただ、この女性は出身が下の村で嫁ぎ先が上の村であり、下の村のカンフツはよく聞いていれば覚えられたが、結婚後に聞く上の村のカンフツは難しいので簡単には覚えられない、すなわちこの談話は「下の村のカンフツよりも上の村のカンフツの方が難しい」ということを言う文脈においてなされるものである。

ここで上・下の村のカンフツの相異を詳細に検討することはできないが、習得上の難しさは両者で大きくは異ならないと考えられる。たしかに、上の村のカンフツの方が唱えるのにより

時間がかかる。しかしそれは内容が多いからではなく、定型句の繰り返しが多いことと、唱え方がよりゆっくりであることによる。カンフツの習得における上・下の村の相異は今後さらに調査を行なう必要があるが、現時点では、下の村のカンフツも上の村のものと同様に一年に一度聞くのみで覚えるのは難しいものと推測される。

また調査中、成員としての経験があるか否かに関わらず、マユンガナシのカンフツの意味内容を川平の多くの人が把握していることがしばしば伺われた。そこで次のような、成員以外の人々による、日常の場におけるカンフツの伝承が視野に入ってくる。

子どもの頃、両親が畑仕事で遅くなる日も多く、そういうときには祖父母の家に行った。行くと、おじいさんが頭から足まで体をきれいに拭いてくれて、着物を着替えさせてくれて、膝の上のせてくれた。右膝にも左膝にも、前にも孫を座らせていた。そうしてよくカンフツを唱えて意味も教えて聞かせてくれた（一九二八年生の女性による談話。二〇〇六年十一月聴取）。

この女性も、部分的にカンフツを節をつけて唱えることができる。談話における「右膝にも左膝にも、前にも孫を座らせていた」という表現は、次のようなカンフツ中の一くだりを念頭に置いてのことである。

「ビダリイヌ、ムムトン、ニリイヌ、ムムトン、ムムヤライ、ダキイシオリイ、タボラリイヌ、カフウデド、マユンガナシイ、ディードウシサリイ、トゥードウ、シイサリイ」  
「左の股と右の股と両股にも子供を抱かれる程子宝に恵まれるよう真世ガナシイとして申し伝えます」

（川平村の歴史編纂委員会編一九七六・二二二）

このようにカンフツ中の表現を用いて子どもの頃の思い出を語る女性はまた、カンフツの内容について次のように語る。

マユンガナシのカンフツは、聞くとすべて頭の下がる思いがする。カンフツの内容は、ものづくりの行程そのもの。私はものを作って子どもを育てて生活してきたから、実感がある（一九二八年生の女性による談話。二〇〇六年十一月聴取）。

「ものづくりの行程そのもの」としてのカンフツの詞章として、次の箇所についてその解釈が挙げられた。

「ウートード、クヌトヌチイ、フウシユウ、ハンセーマイヌ、キラマイ、シヌグ、デ、スード、キュウヌ、ピイ、ユカールー、ピイ、ムトバシ、ナシヨウリタ、タニウリタ、クシライ、トゥーリ、①フウイビリ、ナカイペーリイ、ムトバシ、②ウユウペー

テイ、トウマタドウース、ウイニ、フチポーリイマキポーリイ、シ、フカーバ、(以下略)」

(川平村の歴史編纂委員会編一九七六・二二六、傍線引用者)

①「フウイビリ、ナカイビーリイ」について

昔は(カンフツで唱えられているように、田に) ススキを立てていた。ススキの形のように稲も育つようにとの願いをこめて。父母もやっていたので、それを見ていた自分も、やっていた。

②「ウユウベータイ、トウマタドウース、ウイニ」について

十本の指のような形をした農具で、種を播いた後に土をかぶせてかきまわすこと。

(一九二八年生の女性談、二〇〇六年十一月聴取)

一方この箇所について、『川平村の歴史』(一九七六・二二六)を参考に訳を挙げると、次のようになる。

「謹んで申し上げます。この殿内の御主人様、奥様の、キラマ イシスグ(稲の品種名) でありますが、今日の日、善い日を基にして、苗代田を整地して下さい。①イビリ(すすき三本を束ねて立てた苗代の角)をもとにして、②両手でむらのない様に播きますと、(以下略)」

①については『川平村の歴史』と女性の解釈は同じであるが、②については異なっている。こうした解釈の相異は、人と人との間でも見られる。たとえばこれらの箇所について、一人の男性(成員)は次のように話す。

①「フウイビリ、ナカイビーリイ」について

ススキという説もあるが、フウイビリ、ナカイビリと二つ言うので、大きい畝、小さい畝、という意味である。

②「ウユウベータイ、トウマタドウース、ウイニ」について

両手で、という意味。

(一九三四年生の成員談、二〇〇六年十一月聴取)

この成員男性の場合、②は『川平村の歴史』と同様の意味に捉えているが、①は異なっている。先の女性とは、両方とも異なる解釈になっている。①については、成員としてカンフツを唱える経験をもとに意味を捉えていることが伺われる。

マユンガナシ成員以外の人も、カンフツを儀礼の場や日常において聞き、それぞれの方法で身につけていることが、少しずつ明らかになってきた。こうした事例には今後さらにあたつていく必要があるが、マユンガナシ成員としてカンフツを唱えなければならぬ経験をもつ人以外の人々も、カンフツを唱えられるほどに身につけ、内容を捉えている場合が少なくないようである。ただ、その捉え方は、自らの経験に照らし合わせたも

ので、人ごとに少しずつ異なっている。

#### (6) 捉えられることばとしてのカンフツ

一年に一度の儀礼においてマユンガナシによってカンフツが唱えられる。そのカンフツを、かつての唱え手であった当主が受けとめ、カンフツについての知識をもって応対する。そのまわりでは、マユンガナシと当主のやりとりを見つめる家族がいる。その中の子どもは、カンフツをよく聞くことによつて、ある程度覚えてしまうこともある。また、儀礼の日以外に日常でも、年長者が子どもにカンフツについて教えることがある。教えられたことを素地に子どもは、自らの経験に即してカンフツを理解していく。従来、マユンガナシのカンフツは秘儀的であるという見方がされる傾向が強かったが、そうした秘儀性は成員がカンフツを習得する過程に特に存在し、成員以外の人も含めた川平の全体においては、マユンガナシのカンフツは様々なレベルで広く共有されてきたのではないだろうか。<sup>19)</sup>

儀礼におけることばには、聞く人にとつての「分かりにくさ」ゆえの象徴効果をもつとされるものがあるが、これとは対照的にマユンガナシのカンフツは、その具体的な意味がある程度人々に把握されている。一年に一度マユンガナシによつて唱えられるカンフツは、カンフツを各々の方法で身につけている人々によつて、多くの場合は生活上の実感を伴つて捉えられるというあり方をする、儀礼における「神のことば」である。そもそも、

二章で見たように、テキストから読み取ることのできるカンフツの内容も、人々の生活に即したものであった。カンフツの「神が唱える」側面だけでなく、人々による捉え方について、今後さらに検討する必要がある。

#### 四. 今後の課題

本稿では、石垣島川平の来訪神マユンガナシの儀礼における唱え言カンフツについて、その習得が従来はマユンガナシ成員のみに限られると想定されていたのに対し、様々な立場の人々がこのカンフツを何らかの形で身につけ、カンフツが川平においてゆるやかに共有されている状態の一端を示した。成員以外の人々による日常の場におけるカンフツの伝承について、今回挙げることでできた事例が少なく、この点に関しては今後調査を続けたい。

今日の川平では、マユンガナシ成員も、マユンガナシを迎える家も共に減少傾向にある。そうした中では、今回着目した事例のような、マユンガナシの元成員が年を経てマユンガナシを迎える側に立つという場合も限られてくる。今後は、川平の今日的な変化の中で見えてくるマユンガナシ儀礼の特質についても検討していきたい。

最後に、川平の儀礼で発せられる、マユンガナシのカンフツ以外の様々な歌、唱え言、また儀礼の場に特有の、敬語表現を多用する川平方言による発話についてふれておきたい。これら

の歌、唱え言、発話という三つのことばの形態を厳密に区別することは難しいが、日本音楽学では「音節の引きのばし」と「言葉のふしまわし（本来の言語的抑揚とは異なる音調変化を伴う一定の抑揚をもつこと）」（平野一九八九・九四）の二つの指標から、それぞれが特徴付けられており参考になる。それによるとまず発話には、先の二つの指標は見られない。川平の儀礼における発話も、言語コードの面で特徴をもつのみである。一方で歌には、「その音楽の形式における組織的な法則」（平野一九八九・九四）に基づいた形での先の指標が、二つとも含まれるという。川平の歌もこれに当てはまると言える。対して唱え言には、音楽的組織ではなく、日本語の高低アクセントなどの言語的抑揚がある程度反映された形で、二つの指標が含まれる（小島一九九七・一一〇～一二六）という。さらに川平の唱え言について付記すると、マユンガナシのカンフツは低い声で、女性神役ツカサのカンフツは極めて小さなささやき声で唱えられることによって、言語的な高低アクセントや抑揚の指摘しにくいことばとなっており、これらの唱え言はこうした点において特に、通常の発話と異なっている。

儀礼の内容を構成する要素の核心に、唱え言すなわちマユンガナシのカンフツやツカサのカンフツを位置づけることができる。儀礼の中心部分の周りでは、敬語を多く含む川平方言による発話が行なわれる。それはたとえば、先に見たマユンガナシを迎える家の当主がマユンガナシに対して話しかける際のこと

ばや、また各戸訪問をすべて終えたマユンガナシに対して、女性神役のツカサが労をねぎらう時のことばである。マユンガナシ成員がフームトウの家へ帰る時に歩きながら歌う「オーパンヤジラバ」や「節ジラバ」のように、儀礼の場の移動や転換においては歌が歌われる。このようなことばによる表現の展開は、川平において年間に行なわれる他の儀礼にも見られる。今後は、こうしたことばのそれぞれが人々にどのように担われているかを探り、その過程で他地域との比較検討も行なっていきたい。しかしまずは、マユンガナシのカンフツと、女性神役のツカサによるカンフツツカサのみにその習得が厳しく限られることばの対照性を検討し、川平の儀礼において中核をなすと言い得る二つの唱え言をめぐる人々の知識と実践について考察することが、喫緊の課題である。

#### 注

- (1) こうした研究の集大成として『南島歌謡大成』全五巻（外間他編一九七七～一九八〇、角川書店）がある。
- (2) 本稿では「ことば」という語を歌・唱え言・発話に関して用いる際、文字で記録され得る側面のみでなく、声によって発せられる様態として捉え、かつ、音楽的側面よりも言語の側面に着目するという意味を込めている。
- (3) なお渡邊はこうした理由を挙げたうえで、社会人類学の立場から沖縄本島東村の女性神役による神歌を対象に、その

伝承の実態と社会的意味の問題に取り組んでいる（渡邊二〇〇四）。

- (4) 内田(二〇〇〇)は宮古島狩俣の神歌を対象に、儀礼の場においては神歌の意味を理解していることよりも形式を現出させることが重要であるとされることを、渡邊(二〇〇四)は沖縄本島東村の神歌について、その意味は変化しやすく、また神役は意味を必ずしも把握していないことを述べている。

- (5) 筆者は二〇〇〇年三月以来、主に儀礼の時期に合わせて川平において短期的滞在を繰り返して、儀礼過程の観察と聞き取り調査を行なってきた。

- (6) 「マユンガナシ(真世加那志)」とは、「良い世の中をもたらず神さま」といった意味である。本儀礼の起源を語るものとして、昔、年のかわりめの時節に唱え言をする神が川平を訪れ、それが三年続く間に集落が裕福になり、以降は成年生れの男性数人が神に成り代わってカンフツを唱え、儀礼を続けてきたという話がある(川平村の歴史編纂委員会編一九七六・三四〇〜四)。

- (7) ここで人(ツカサ)から神へ、神(マユンガナシ)から人への二つのカンフツがあるとやや図式的に述べたが、ツカサが年間を通して祈る対象は、マユンガナシそのものではない。ツカサは、オンに常駐する神、米作の時期に合わせて川平に迎える神(ニランタファン)、火の神といった、

「目に見えない」神々に対して年間を通してカンフツを唱え、祈願している。

- (8) たとえば、「神フツは一言一句でもあやまつ時は、神罰立ちどころに下ると信じられ、またこの神授の言葉を他人に漏らすことも許されない。」(湧上一九七一・四五)というように、カンフツの伝承と実践をめぐる厳格さが強調されることが多かった。

- (9) また、儀礼当日に成員が人から神に成り代わる場面や神から人に戻る場面、マユンガナシが家から家へ移動する場面を、成員以外の人は見てはならず、人々は自宅においてマユンガナシを待つべきとされている。人が成り代わる神としてのマユンガナシの「人らしさ」が見えにくいようにされているのである。

- (10) なお、成員がマユンガナシに成り代わる過程と、マユンガナシ儀礼を終える手続きは澤井(二〇〇五・二〇〜一)に略述しているが、成員達はフームトウの家の庭での神装後、甕に用意された水で一人ずつ口をすすぐと、以降はカンフツを唱える以外のことを発しないことを補足する。

- (11) 定型句は「マユンガナシイデ、カン、カザル、ピントオードウ(マユンガナシイが、かく唱え、かざるのである)」「(川平村の歴史編纂委員会編一九七六・一〇七)といった、それまでに述べてきたことがマユンガナシによるものであるという意味の文言で、内容の区切りごとに繰り返される。

なお、カンフツの詞章は、筆者自身が調査において音声資料を取得し、それをもとに書き起こすことが望ましいが、現在の川平ではカンフツの録音が禁じられている。そのため本稿では、川平の人が執筆・編纂した字史『川平村の歴史』中に掲げられる詞章を引用している。またカンフツの詞章の全文は、沖縄県教育庁文化課（一九八九・一六七～二〇八）、川平村の歴史編纂委員会編（一九七六・一〇七～一二一・一二二～一三二）、外間・宮良編（一九七九・一九～三四）に挙げられている。

(12) なお、カンフツへの返事を中心とした、マウンガナシ儀礼における神を迎える側の問題は、澤井（二〇〇五）で論じている。

(13) なお、マウンガナシ儀礼において神に対して使う当主のこゝばを含め、川平の年中儀礼では敬語を多用する川平方言によって発話を行なう場面が頻繁にある。こうした儀礼の場の特徴的な発話については、澤井（二〇〇七）で論じている。

(14) 近年、迎え方を習わずに、マウンガナシを迎えること自体を止めてしまう家も増えている。また、マウンガナシを迎える家が少なくなったために、成員を辞めて、迎える側の当主にまわった人もいる。こうした状況からも、マウンガナシ儀礼における神を迎える側のはたらきの大きさが伺われる。

(15) なお、当主はカンフツを、唱え方の上手・下手の評価基準をもって聞いている。カンフツを唱える声は「よくタンが出ている」と表現される低い声がよくとされる。また、急いでいるような印象も、逆に緩慢な印象も与えず、かつ小一時間におさまる唱え方が望ましく、そのためには基本的に落ち着いてゆっくりと唱え、定型句の部分で少しスピードを速めると良いという。当主のこうした評価も、元成員としてカンフツを唱えた経験に基づくものである。

(16) マウンガナシを迎える時に使われる部屋は、多くの場合その家の「一番座」である。一番座とは、その家において最も良いとされる部屋で床の間が設置されており、客を通ずるときなどに使われる。普通は南面の部屋が東から順に一番座、二番座とされ、二番座には仏壇がつくられる。

(17) 内田（二〇〇〇・五七～八）も、宮古島狩俣の神歌の一つ「タービ」について、それが人々に一語一句わかるようによまれるものではないこと、その場にいる人々も始終神歌を聞くことに集中しているわけではないことを記述している。今後「発せられることば」を対象とするうえで、こうした各事例の場の実際を含めて捉えていく必要があるだろう。

(18) 川平では「シツ（節祭）のカルイ（嘉例）を付ける」という言い方がある。子どもを当主の横に座らせることによつて、マウンガナシがもたらす「シツのカルイ」を、より多

く受けさせようとする考え方があ

- (19) 第三一回日本口承文芸学会大会(二〇〇七年六月)において、共有されることばとしてのマウンガナシのカンフツについて口頭発表した際、高木史人氏から、川田順造氏による「シンローグ」の概念についてご教示頂いた。西アフリカのモシ族社会では「親密な小集団」としての「座」において「お話」が行なわれるが、それは「潜在的な話し手」である聞き手の相槌、介入、訂正、補足の中で進行するという(川田一九九二・八四、九九)。こうした共に座をつくる人々の発話の一つの話に総合される事態を指して、川田氏はシンローグ(共話)という造語を行なった(川田一九九二・一五三)。「座」における「お話」に対しマウンガナシのカンフツは儀礼における唱え言という違いがあることをふまえたうえで両者を比べてみると、多様な発話がある中で一つの話をつくるシンローグに対し、マウンガナシのカンフツは発し手もテキストも基本的に一通りに固定しているが、神による一通りの発話が、人々によってある範囲内での多様性をもって受けとめられているという対照的な方向性をもつ。
- (20) たとえば、渡邊が対象とした沖縄本島東村の神歌は、聞く人々にとつての「分かりにくさ」と象徴効果をもつ(渡邊二〇〇四・一九一〜二一六)。

#### 参考文献

- 内田順子『宮古島狩俣の神歌―その継承と創生』二〇〇〇 思文閣出版
- 沖縄県教育庁文化課「石垣市字川平のシチイの神歌」沖縄県教育庁文化課編『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動(Ⅱ)』(沖縄県文化財調査報告書第九一集)一九八九 沖縄県教育委員会
- 折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集』一九九五 中央公論社
- 川平村の歴史編纂委員会編『川平村の歴史』一九七六 川平公民館
- 川田順造『口頭伝承論』一九九二 河出書房新社
- 小島美子『音楽からみた日本人』(NHKライブラリー57)一九九七 日本放送出版協会
- 澤井真代「石垣島川平 マウンガナシのカンフツに関する一考察―カンフツを聴く人の視点から―」『奄美沖縄民間文芸学』第五号 二〇〇五
- 同「儀礼の場における発話―石垣島川平の事例―」『奄美沖縄民間文芸学』第七号 二〇〇七
- 平野健次「歌」平野健次他監修『日本音楽大事典』一九八九 平凡社
- 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成(Ⅳ八重山篇)』一九七九 角川書店
- 湧上元雄「沖縄の呪術文学―八重山川平の『マウンガナシの神口』考―」『琉球大学文学語学論集』第一五号 一九七一
- 渡邊欣雄『民俗知識論の課題―沖縄の知識人類学―』二〇〇四 凱風社
- (さわい・まよ)総合研究大学院大学